机原三本松遺跡

— 県営富士見高原産業団地造成
事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1998

机原三本松遺跡

— 県営富士見高原産業団地造成
事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

例　　言

1．本書は、県営富士見高原産業団地造成事業に伴う、机原三本松（つくえはらさんぼんまつ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県土地開発公社の委託を受けて、富士見町教育委員会が実施した。

3．本調査において、立木の伐採を諏訪森林組合に、基準点測量および航空写真測量を中央航業株式会社に、放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ委託した。

4．発掘調査および整理作業は、平成７年７月24日から平成10年３月30日まで行われた。

5．発掘調査は樋口誠司・小松隆史が担当した。また、本書の執筆および実測図等の作成にかかわる作業分担は以下のとおりである。

(1) 原稿執筆　樋口　誠司

(2) 遺物整理・遺物復元　　吉川哲也　　吉岡　博子　　小池　敦子

(3) 遺構トレース　　吉川　哲也　　吉岡　博子　　小池　敦子　　平出　恵美

(4) 遺物実測　　小松　隆史

(5) 遺物トレース　　小松　隆史

(6) 遺物写真　　樋口　誠司　　小松　隆史

6．本報告にかかわる出土品、諸記録は井戸尻考古館が保管している。

7．調査時、穴と番号で発掘を行ったが、整理の段階で陥穴はそれを明記し、その他は土壙と改めた。

目　次

例　　言

第1章　遺跡の環境と調査の経緯 …… 1
　第1節　遺跡の位置と環境 …… 1
　第2節　調査の経緯と経過 …… 1
　　1．調査の経緯 …… 1
　　2．調査の経過 …… 5
　　3．No.1地点の調査 …… 6
第2章　発見された遺構と遺物 …… 8
　第1節　旧石器時代 …… 8
　第2節　縄文時代 …… 9
　　1．早　　期 …… 9
　　2．前期前葉 …… 10
　　3．前期末葉 …… 11
　　4．中期初頭 …… 16
　　5．晩　　期 …… 17
　　6．陥　　穴 …… 18
　　7．土　　壙 …… 19
　　8．集　　石 …… 19
　　9．鍬状耳飾 …… 21
　第3節　平安時代 …… 21
　第4節　近　　世 …… 25
　第5節　地山の裂傷 …… 25
　第6節　机原三本松遺跡出土木炭放射性炭素年代測定報告 …… 28

写真図版

第１章　遺跡の環境と調査の経緯

第１節　遺跡の位置と環境

机原三本松遺跡は、富士見町落合机に所在する。ＪＲ信濃境駅から西方に約1.7km、ＪＲ富士見駅から南方に約3.9kmの位置にある。

八ヶ岳の裾野は、扇の骨のように大小の河川によって浸食された、いくつもの帯状の台地や尾根筋が、西あるいは南に向かって走っている。立場川より南麓部の尾根は、東西から南北に向きを変え、なだらかに傾斜しながら、釜無川によって浸食された断崖まで延びている。本遺跡を含め、遺跡の多くはこうした台地や尾根の先端部分の、標高850から950mの範囲に集中している。

ここからは、八ヶ岳の編笠山と西岳がちょうど正面に見え、また甲斐駒ヶ岳・鳳凰三山、そして釜無山から入笠山系の山並みが望めるところである。

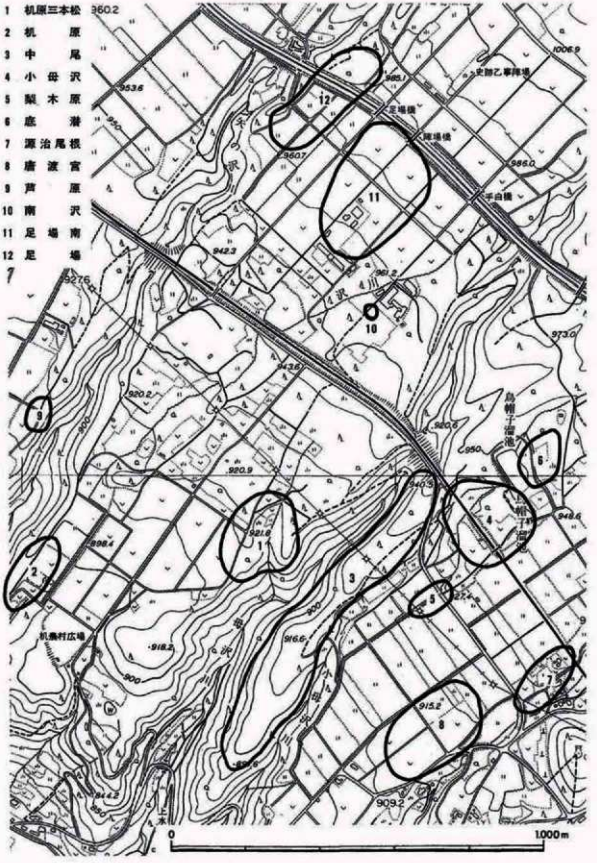
本遺跡は、南側を母沢川によって開析された尾根上にある。沢はわりと深く、尾根との比高差は40から50mもある。標高は920mを測る。遺跡は昭和55年、机原農業構造改善事業に伴う造成工事によって発見され、一部について検出・調査が成されている。その結果、縄文時代前期から前期末葉の遺跡であることが判っている。

そしてこの辺界隈では、机原遺跡(2)、中尾遺跡(3)、小母沢遺跡(4)、唐渡宮遺跡(8)、向原遺跡とならんで、縄文時代前期から前期末葉の典型的な集落立地と遺跡が密集する地域であり、該期の遺跡のあり方や相互の関係を知る上で、極めて重要な遺跡として位置づけられる。

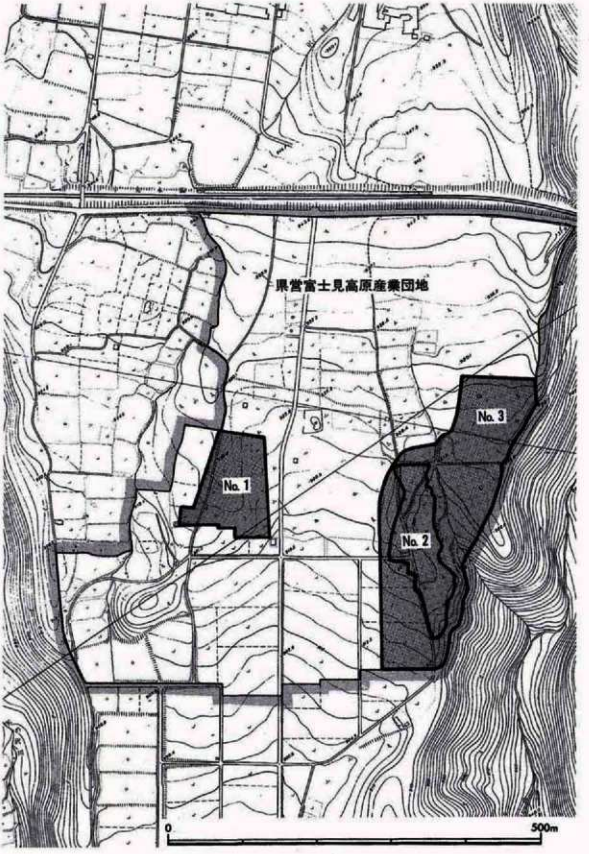
第２節　調査の経緯と経過

１．調 査 の 経 緯

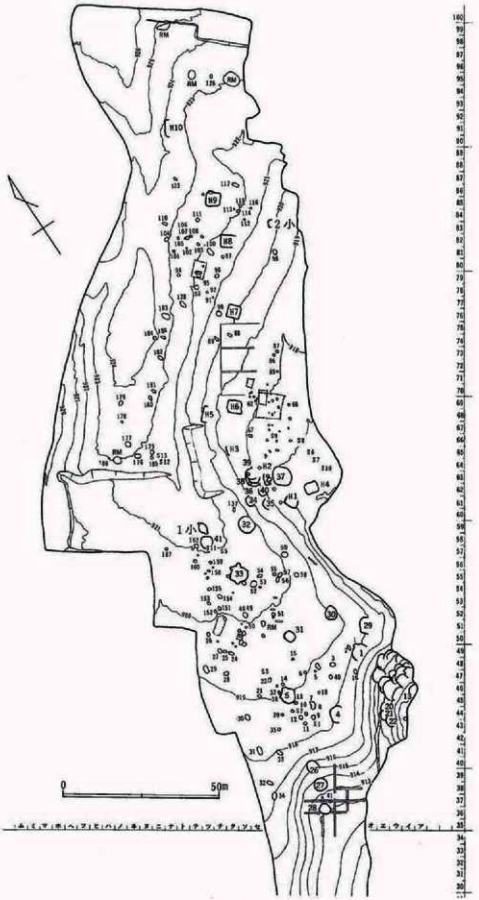
町商工観光課および県教育委員会文化課より町教育委員会に対し、富士見町落合字机原7026番の土地を中心に県営富士見高原産業団地の計画があるが、予定地内に埋蔵文化財があるのか否かの打診があった。町教育委員会では、予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、開発にあたっては事前に緊急発掘調査を実施し、記録を図らなければならないことを伝えた。また予定地内には、ほかに遺跡包蔵地の可能性がきわめて高い場所が二箇所あり、試掘を行い遺跡の有無について確認する必要があることも指摘した。



第1図　机原三本松と周辺の遺跡 (1/10,000)



第２図　県営富士見高原産業団地と遺跡発掘区(1/5,000)



第3図 遺跡全体図 (1/1,200)

2．調 査 の 経 過

そこで平成７年度は、これら三箇所（一か所は机原三本松遺跡）について、遺跡の規模・性格や内容についてトレンチ掘りの方式を採り、試掘調査を実施することになった。対象地区を便宜的に№１から№３と付し進めたが、№３については事務手続上の遅れから先送りせざるをえず、まずは№２地点から実施した。

試掘の結果、№１については小竪穴２基を検出したに止まったものの、№２については、縄文時代前期から中期初頭の住居址６軒、小竪穴13基と石器・土器などが見つかり、試掘のできない箇所を含めると、かなりの規模の集落になるものと予想された。

そして、町教育委員会で作成した産業団地内遺跡試掘報告をもとに、現地にて県土地開発公社、県教育委員会文化課、町商工観光課、町教育委員会の四者で№２地点の保護協議と№３地点および未調査区の調整について協議を行った。後日、№３地点の一部について試掘の許可がおりたので、鉄塔敷分とその周辺についてトレンチ掘りを行ったが、遺構を発見するに至らなかった。この結果、№２地点とした周知の遺跡である机原三本松について調査を実施することとなった。

県土地開発公社から造成工事をするに当たって、調整池の区画を優先して進めてほしいということになり、そこから始めることにした。そこは現地が林であったため、試掘のできる状態でなく、地下の状況については把握できていなかった。そのため伐採を待って重機を搬入し、抜根作業からまずはじめた。根の数も多く、樹齢がたって大きなものもあり、結構手間取った。

つづいて南向きの斜面と、地形が湾状になっている場所(6577－25他)の表土を除去し、遺構の有無について調査した。表土が思ったより厚く、なかなか進まない。黒色土の下部で黒曜石と土器片が見つかり、そこを中心に広げたところ、住居の落ち込みが確認された。

重機を南向きの斜面に移し、表土剝ぎをする。尾根上からすこし下がったところで２軒の住居址を検出した。下方は斜度がきついうえに堆積土が厚く、二度三度に分けて土を振り上げねばならず、難航した。ここからは最終的に22軒の住居址を検出した。

尾根上にうつり、平坦部と道路北側の牧草地については、ブルドーザーで表土を押し、重機２台で遺構の確認作業を並行して進めた。牧草地については、昭和55年の農業構造改善事業で大半が削平されていたため、一部に遺構が見つかったのみであった。さらに6964番と6965番に移り、平安時代の住居を１軒検出した。

試掘を終え、本格的に調整池の予定地の調査に入る。遺構の数が多く、単年度で終了することができないので、この年度は調整池から南側を発掘することとなった。そこで、調整池の北側に50列のグリッド線を設け、次年度分と接合できるように杭を設定した。

検出した遺構は、住居址28軒、墓穴などの穴37基、陥穴９基、集石３基で、縄文時代前期中葉から中期初頭(約5600から5000年前)の集落跡であることが判った。発掘終了後、ヘリコプターによる航空写真測量を行い、調査を完了した。

冬期間は、出土した遺物の洗浄と整理、図面の整理、写真の張りつけとフィルムの整理を行った。３月にはいってからは、№３地点の試掘の残りと表土剝ぎを実施した。試掘対象面積7052m²の山林につい

てはトレンチを入れて調査したが、縄文時代の打製の石鏃が１点出土したのみで、遺構は検出されなかった。

八年度になって、5677番・7080番の桑畑の試掘を最初に行い、小竪穴と陥穴らしい落ち込みを確認した。遺構の数が多くないことから、ダンプをいれて土を搬出し、表土剝ぎの効率をあげた。その後、調整池から北側へ重機で表土剝ぎをおこない、遺構の確認作業をすすめた。6959番のあたりから平安時代の住居が現れた。結局、10軒が北側に一列状態で並んでいた。

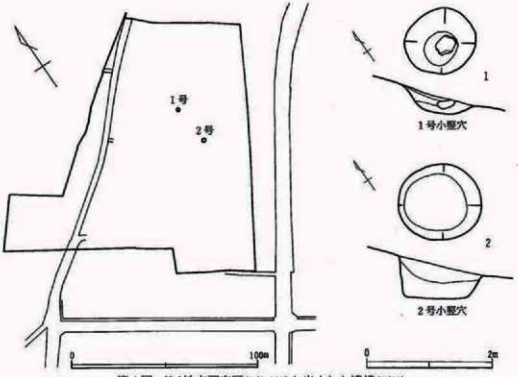
遺構の数と配置が把握できたところで、50の杭列から北に発掘を始めた。33号の南東側、サ～スグリッド内で、地山が裂けたいわゆる地割れの跡が見つかり、周辺の調査が一段落したあとでトレンチをいれて断面の観察をした。尾根の低いほう、湾状になってわりと平坦な地形に移り、平安時代の住居と早期押型文の住居を掘る。少し上手に移って精査。近世以降の建物址３棟を検出した。

縄文時代の陥し穴と晩期の小竪穴、平安時代の住居を調査し終えたのちに、5677番・7080番に移り小竪穴と陥穴を調査。最後にロームマウンドを掘って完掘した。

検出した遺構は、縄文時代早期の押型文の住居址１軒、縄文時代前期中葉から中期初頭(約5600から5000年前)の集落跡で住居址12軒、建物址２棟、小竪穴２基、墓穴などの穴47基、陥穴17基、集石５基、平安時代の集落跡で住居址10軒、近世以降の建物跡４棟が見つかった。発掘終了後、ヘリコプターによる航空写真測量を行い、調査を完了した。

３．№１地点の調査

№１地点とした遺跡は、県営富士見高原産業団地の計画予定地内に所在する。ここは机原三本松遺跡から、なだらかに南に傾斜する平坦部を挟んで、北へおよそ１３０ｍの地点にある。この尾根は、昭和55



第４図　№1地点調査区(1/2,000)と出土した遺構(1/60)

年の机原農業構造改善事業の際に下方を削り取られており、上方の250mほどが残っている。東側に緩く傾斜する、いかにも遺跡がありそうな地形を成している。遺跡包蔵地の可能性があることから、試掘をして遺跡の有無について調査を実施した。

重機によるトレンチを、尾根の頂部は南北、東向きの斜面は東西方向に試掘対象区全体にいれた。その結果、7013－３番の畑の尾根の落ち口部と、7013－２番の畑の尾根の下端部、地形の変換点に小竪穴を検出した。

１号小竪穴は、尾根の下端部の最も深い、地表から120cmのところから見つかった。東西方向が少しだけ長い径122cm、深さ70cmの盤状の穴である。底はいくらか凸凹があるが、総じて平ら。北西側の立ち上がりがきつい。２号小竪穴は尾根の落ち口部、地表から30cmのところから見つかった。径110cm、深さ40cmの円形で、すり鉢形を呈する。両端を打ち欠いた、わりと平たい人頭大ほどの安山岩礫が１個だけ入っていた。

遺物が１点も出土していないため、時期はよくわからないが、穴の状況から推して縄文時代のものと思われる。遺構はこの２基の小竪穴のみで、遺物は全くみつからなかった。

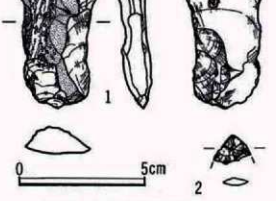
第２章　発見された遺構と遺物

机原三本松遺跡（№２地点）の平成７年と平成８年の二カ年で検出した遺構と遺物は、旧石器時代の剝片石器であるブレイド１点、尖頭器片１点、縄文時代早期の住居址１軒、縄文時代前期から前期末葉の住居址37軒、掘建柱建物址２棟、中期初頭の住居址３軒と土壙163基、陥穴25基、集石14基、晩期の土壙17基と平安時代の住居址10軒、近世以降の掘建柱建物跡４棟、地山の裂傷（活断層の活動によって、地山が裂けたあと）３条である。このほかに風倒木痕（ロームマウンド）４基について調査をした。

第１節　旧石器時代

遺構確認のための精査の段階で、76ソのグリッド、陥穴の東側から剝片石器のブレイドを検出した。この時点でロームを削っての調査はできず、ひとまず出土状況の写真と図面の記録をとり、陥穴の写真や計測、近世の掘建柱建物跡の調査をまって、削平した。かなり広い範囲を対象に調査したが、ほかに何も発見できなかった。また、５号建物跡の北側から尖頭器と思われる破片が出土した。

１はブレイド。表面には、麦草峠に産出する黒曜石の特徴的な白色の縞模様がある。中央の肉厚の部分に自然面をいくらか残している。右側縁部は表側に、左側縁部は裏側にそれぞれ使用による刃こぼれ痕か、もしくは刃部のつくりだしの、調整剝離がみられる。また細い線状の使用痕が表では右から左に、裏側は刃に並行するようについている。全体に薄い膜がかかって風化し、光沢が失われている。２は尖頭器と思われる破片。黒曜石製。押圧剝離によるひとつひとつが規格的で長く、基部の中心に向かって規則的に剝ぎとって、形を整えている。

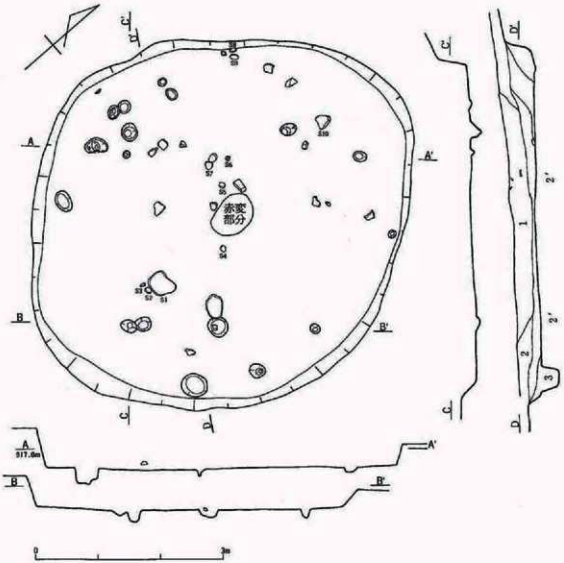


第５図　旧石器時代の遺物(2/3)

第2節 縄 文 時 代

1. 早　　期

37号とした該期の住居は、母沢川に落ちるいくつかの小さな枝沢の最上部、わりと平たくなった沢寄りに1軒だけぽつんと見つかった。試掘の段階で、南北にトレンチを入れた際、前期末葉の籠畑式期の石器や土器がかなり出土し、同期の住居があるものと考えていた。実際、この辺りの遺構確認と精査の時にも、大きな破片の土器と石器が整理箱で3箱分出土している。住居の輪郭を出してから南北にベルトを設け、下部へと掘り進めた。炭まじりの黒色土を取りのぞくと、遺物は全く出なくなった。出土した遺物のなかに押型文の破片がいくつかあることに気づき、早期の住居の可能性も考慮して掘りつづけた。2層以下は地山のロームと同じ黄褐色土で、わりとしまった堆土となる。遺物が壁から出てきて当



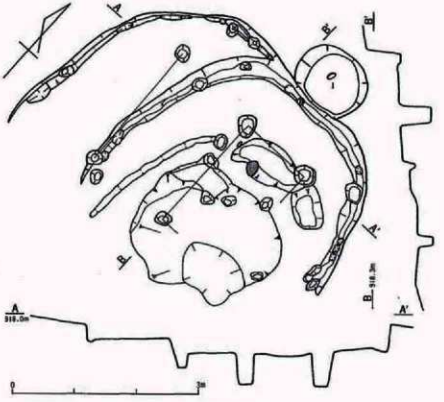
第6図　37 号 住 居 址 (1/60)

初の輪郭では立ち上がらず、結局すこしずつ広げて、一回りほど大きくなった。

住居の中心から南によった床上から、板状の磨盤石と磨石がセットで出土した。両方とも西側が少し高くなっていた。磨盤石は、磨れている面が下方になって伏さっていた。磨石のすぐ西側に、硬砂岩の石器片があった。北側の壁際から磨石２個が、落下して重なりあったかのように出土した。ほかに拳大から人頭大の安山岩礫が北側に多くみられ、中には故意に割ったものもあった。住居の中央に、周りとは違う赤変した部分が見られたが、焼土とする積極的な根拠がなく、炉とするにも不十分なことから範囲とレベルをおさえて平らにした。堀り込みもなくそのまま床となった。住居全体で、両手分の押型文の土器片のほか、石器はホルンフェルス製の鏃先１、スレート・粘板岩製の石庖丁各１、凹石１、磨石２、石鏃１、剝片石器２点が出土した。

平面形は南北5.93m、東西5.95mの隅丸方形にちかい、各辺がいくらか外側に張る、不整の円形。深さは最も高い北西側で64cmを測る。柱穴はどれもみな浅く、柱とするに十分でないが、北側の３本と南側の３本が主柱穴になるものと思われる。床は固くなくほぼ平らだが、壁際がいくぶん高くなっている。炉がないことから、集石のいずれかが該期の調理を担っていたと考えられる。

本址は、菱形の押型文様を有する土器から、早期の細久保式期の住居址と判断される。



第７図　１号住居址（1/60）

２．前期前葉

黒浜式期から諸磯Ａ式期。本遺跡に営まれた集落の中心的な時期。住居18軒、小竪穴１軒、土壙２基。住居は、尾根の縁辺と東向きの斜面の住居集中区にまとまっている。１号土壙は、41号の北に位置し

ている。土壙の2基は38号址の中にある138号と139号。いずれの穴からも、北白川下層Ⅱ式の土器片が得られた。

1号址は東向きの斜面、住居群の集中するところからすこし北に寄った、標高の高いところに位置する。この辺りから東へ傾斜がきつくなり、傾斜角は30°から40°となる。本址はこうした地形のために、南側の半分ほどが不明となっている。

主軸は南北。住居は新旧があり、内側のほうが新しい。旧住居は四分の一が残っているだけである。壁に沿って周溝が巡り、ところどころに10cm前後のピットがみられた。壁高は27cm。床はロームで固く、平らでしまっている。かろうじて北側の2本の主柱穴が残っている。

新住居も残存状態はよくない。くわえて真ん中には大きな攪乱の穴が開いていた。この下部からは、かなり腐敗した銭貨「寛永通宝」が出土した。穴の中、西南に主柱穴の一本が確認された。

主柱穴は4本でうち1本は不明。炉はかなり北によった主柱穴の間にあり、住居のわりに小さい。床はロームで固くしまっている。西側には、周溝が一部二重になっているところがあることから、もしかするとこの住居も新旧があるのかもしれない。北には、径120cmで深さ70cmの1号穴が接している。上面の中ほどから磨石が出土した。遺物は整理箱で1箱出土した。出土した遺物から、本址および1号小竪穴は黒浜式期である。

26号址は、南向きに傾斜する湾状の斜面のいちばん上に位置する。本址の下には27号、28号が等間隔で並んでいる。平面の形は円形と目されるが、南側は斜面で立ち上がりを捉えることができなかった。

柱穴状の穴が4箇所見つかったが、配列としてはあまり理想的とは言えない。炉は、住居の中軸線の奥まった柱穴の手前にある。住居のわりに小さく、しっかりとした掘り込みがない。また赤みも弱く、焼土が発達していない。床は、奥ほど固くしっかりしている。南側の斜面に近いほうに、径80cmの浅い盟状の穴がある。

遺物は多くない。炉の南側の床面に底部のみが逆さになっていたものと、東側の壁の近くに裏になっていた縄文地の破片がわりと大きいものの、ほかは小破片。整理箱で一箱分あるが、すべて縄文地の土器である。なかに一片だけ繊維の混入した土器片があった。また波状の口縁部で、篦状の工具による幅広の、しかもあらい文様がつけられた土器片が1点ある。時期は黒浜式期。

3．前　期　末　葉

日向から籠畑式期。本遺跡に営まれた集落のもうひとつの中心的な時期。居住の仕方などは前期前葉のあり方を踏襲している。住居16軒と建物址2棟。東向きの斜面、住居集中区に10軒がまとまり、すこし北に寄って、33から36号の4軒がまっとまっている。

9号址は日向式期の住居址で、東側斜面に集中する住居址のうちの一つ。出土した遺物は、整理箱2箱分。石器は粘板岩製の鏃先2、石庖丁2、安山岩製の磨石2、黒曜石製の剥片石器8、ピエス・エスキーユ4などである。土器は、竹管による平行線・斜行・綾杉文などの上に、2個組のボタン状張り付け文のあるものと、2列組の結節状押引文で渦巻状の文様構成をとるものなどが5個体分ほどある。

33号は5号と同じく、どちらかといえば尾根の平坦な標高の高い場所に位置する。精査をして住居の輪郭を出す際に、中ほどに焼土と多くの遺物が現れだした。土壙173号出土の滑石製の缺状耳飾も、この

時点で取り上げたものだ。住居の周辺には幾つか穴が重なっていたが、重複関係が不明なため、やむを得ず住居を優先して発掘した。

遺物は多いほうで、住居の南側と焼土の北側に５個体分の土器が細かく割れていた。また安山岩の小さな礫が、住居全体から散見された。北の壁近く、拳大の安山岩礫が集積している所に、磨石や凹石などと一緒に土器がまとまっていた。北東の壁にある土壙170からは小児の頭大の安山岩礫５個と凹石１個を、拳大から鶏玉大のこぶりの安山岩119個が被さるようにして、穴の片方に寄って見つかった。炭がわりと目立つ。この下部から住居の柱穴が見つかったことから、土壙117号のほうが新しい。

住居は長軸5.60m、短軸4.52mの長円形。壁の少し内側に10本の柱穴が等間隔に並んでいる。これらのうち、２つに新旧のある例がみられた。中ほどに中央がすこし窪んだ炉がある。焼土部分は焼けていてかなり固く、20cm下まで焼けて赤変していた。床は壁際をのぞき、平らでしっかりとしている。

出土した遺物は、整理箱で３箱。石器は、粘板岩の鋸先１、石庖丁１、凹石５、磨石３、石錐２などである。土器は、口縁部の下にソーメン状の粘土紐を鋸歯状に貼付した縄文地の胴下半を欠失した深鉢が１個と、同じ手法で口縁部に３条の粘土紐をめぐらした深鉢の上半部のほか、籠畑Ⅰ式の土器３個体分がある。また床面から、土製の缺状耳飾の半欠品が出土した。

36号は早期の住居の後方、北側にあって、住居域の北端に位置する。東に緩く傾斜する斜面の下方にあり、地形はここから、南東に向く平坦地となっている。精査の段階で住居の輪郭が不自然だったため、ベルトをすこし南に寄せて設定した。このことが幸いし、この断面で３軒（36・38・39）の重複関係を摑むことができた。

36号は最初から炭が多く、炭の範囲が住居の輪郭となっていた。堆土を下げていくと、西北側のベルトの横から縄文地の土器下半と特殊磨石と呼んでいる磨石が出土し、一方東側の床面からは、諏訪盆地の方で梨久保式と呼んでいる、土器の上半のみが口縁部を上にして出土した。

土層を観察してベルトをはずしていくと、北西の土器のあった場所の横から、土製の缺状耳飾が２個並んで出土した。耳飾り同志の間隔が16cm、高さもほぼ等しく、缺けた部分が内側を向いていた。周囲の状況等も鑑みて、住居内に埋葬されたいわゆる廃屋墓の可能性が高い。

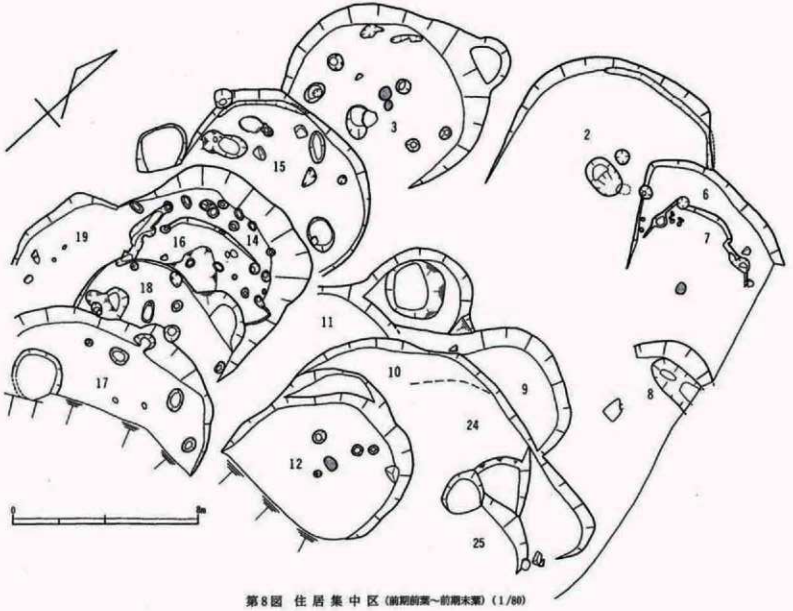
住居の北半分は、39号によって損なわれている。南半は本址が新しいものの、貼り床などが見られず、あまり差のない38号の床になってしまって、不明なところが多い。平面形は小判形で、主軸は南北でおよそ６m、東西方向は推定で４m30cmを測る。主柱穴は４本。炉は39号によって失われている。床はロームでしっかりとしていて固い。壁は最も高いところで30cmを測る。

西北と北西側に径１メートルほどの土壙があるが、穴の状況から墓と目される。両方の穴からは、住居よりも古い、北白川下層Ⅱ式期の土器片が出土した。

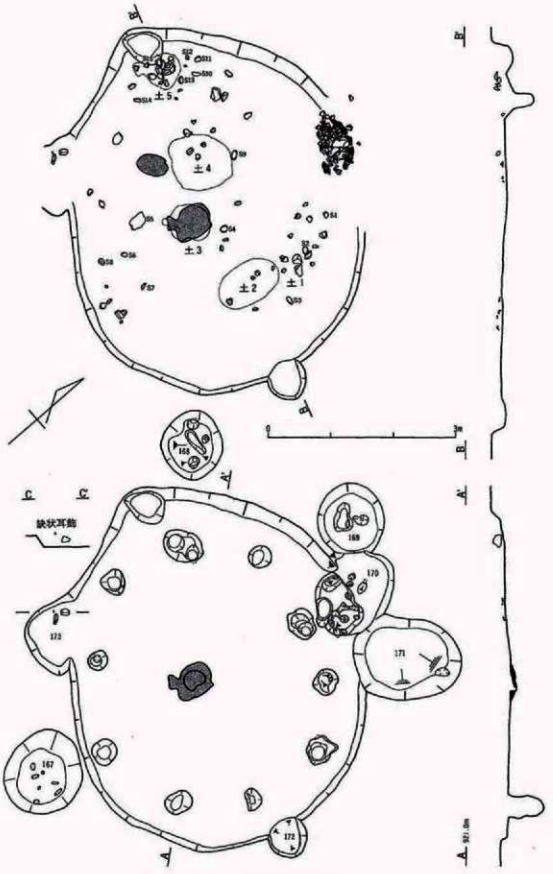
出土した遺物から、本址が籠畑Ⅰ式期、38号が北白川下層Ⅱ式期、39号が九兵衛尾根Ⅱ式期である。

建物址は５号と６号の２棟が検出された。これらは33号址から南西へ17m、尾根の平坦部のところにある。この辺りは遺構確認作業の段階で、すでに小形の穴が幾つか確認されていた。直線的であることから、建物址の存在も考慮に入れて周囲を二度三度ジョレンがけを行った。

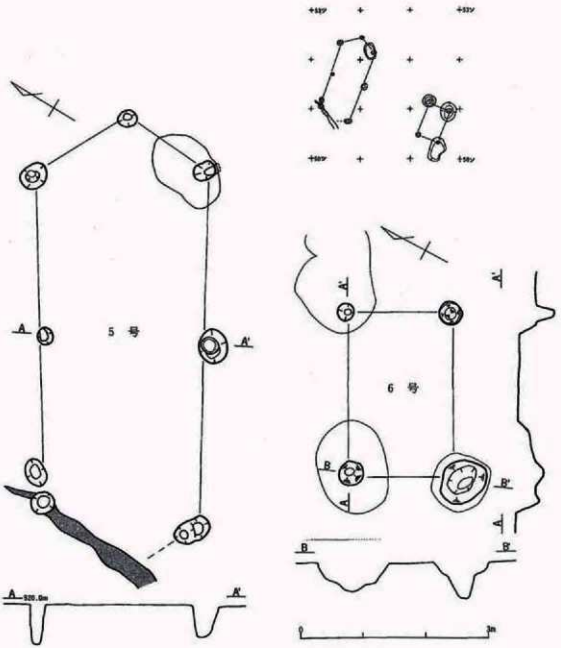
５号は、主軸をおよそ東西にむける。それぞれの下部に炭の多い部分はあるものの、各穴とも柱痕跡は認められなかった。穴の形状や深さが似通っていて、直線的であり、二間一間の間取りとなっている。妻側、少し外にでたところに棟持柱に相当する穴がある。この穴の堆土は、他の穴と違ってかたくしまっ



第8図　住居集中区（前期前葉～前期末葉）（1/80）



第9図　33号住居址（1/60）



第10図　5号・6号建物址（1/60）

ていた。西側の棟持柱に相当する場所は、地割れのところと重なっており、土目が似通っていて柱の輪郭を捉えることができなかった。これらの柱穴からは、縄文地の小さな土器片が出土した。

6号は5号の南7mのところにあり、棟の方向を同じくして並んでいる。北側の2本は、土壙と重なっており、その下部から柱状の小穴が見つかった。長さ2.80m×1.74m。ちなみにこの長さは、5号の妻側の長さと同じである。

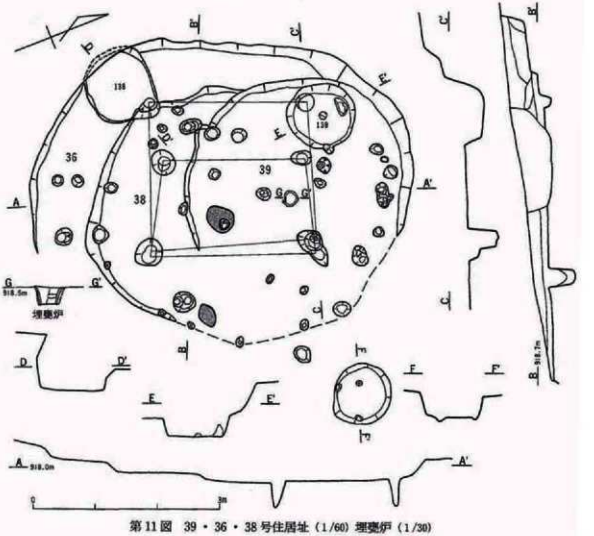
これらの建物址を集落構造のあり方から見ると、墓群と重なり住居の列よりは内側に位置していて、いわゆる典型的な環状集落の構造と同様な意識がうかがえる。

4．中 期 初 頭

九兵衛尾根Ⅱ式期。21、31、39号の住居址３軒。31号を真ん中にして対照的な配置をしている。39号は、36号と同時に調査を行った。住居の中央にひときわ目立つ炭粒が散っている箇所があり、39号のものとして一気に掘り進めた。ところが、堆土から出てくる遺物がほとんど新しく、別の住居が重なっている可能性が強くなった。北側で床を追っていくと、弧状に内側にはいり、床は39号のものとわかれ、20から25cmも低くなって、段差ができた。そして住居の中ほどより埋甕炉がみつかり、全く別の住居となった。主軸は東西。南北で３m60cm、主軸の側は東方が斜面であったために立ち上がりが不明だが、概ね３m80cmくらいになろう。床はロームで固くしまっている。東側は、斜度がきつくなるほど軟弱となる。主柱穴は４本で、支柱穴がそれらの間に開いている。北側は支柱穴の痕跡が見当たらない。

埋甕炉は、口縁部をすこしだけ出して平らに据え置いている。東半分を切って断面をみたが、胴下半を切った深鉢を、きっちりと据えているのが観察できた。焼土は中ほどの北側に少しだけあったのみでほかは炭粒と焼土粒の混じった褐色土が入っていた。

南東側には、径40cmの焼土がみられた。３cm厚で固くしまっていて、主柱穴の一本がそれを切っている



第11図　39・36・38号住居址（1/60）埋甕炉（1/30）

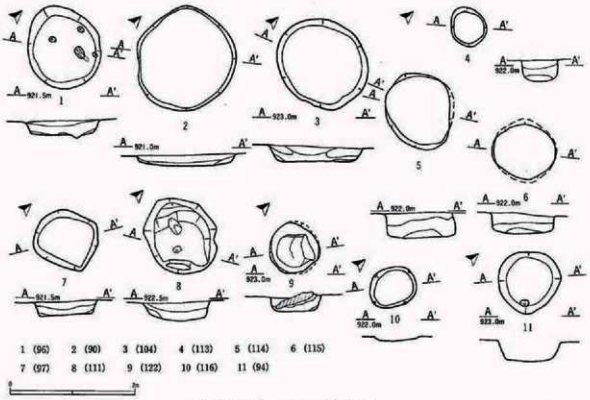
た。これは38号の炉で、かろうじて残ったものだ。38号の床との差は16cmである。

3軒のうち、9号址にだけ埋甕炉が設けられていた。

5．晩　　期

数多い土壙のうち、17基が晩期の穴と思われる。それらは発掘区の北寄りから見つかっている。ほとんどは墓穴と目される。住居は発見されなかった。ちなみに、該期の住居が母沢川を挟んで向かい合う、中尾遺跡から3軒見つかっている。

96号は79チのグリッドに位置する。径1.20cmほどの円形。深さが20cmで立ち上がりはなるい。黒褐色土で細かい炭粒とローム粒を含む。3層に分層できるが、みな黒色系で暗い土。土器は晩期の条痕または条線文の破片で、1個体分と割れた磨石片が出土した。90号は76チのグリッドに位置する。径1.60mほどの円形の穴で、深さが14cm、立ち上がりはなるい。土目は96号と同じで、暗い。104号は82ナのグリッドに位置する。径1.60mほどの円形で、規模などはよく似ている。この穴からは、晩期の土器14片、8個体分が出土した。112から116号は、H－9号址の南側およそ5m離れた位置にあって纏まっている。穴の大きさに大小あるが、堆土の状況や土層のあり方がみな共通している。土目は90や96号と同じ。114と115号は一部内壔しているところもある。どれもしっかりとしていて、底は平らで固い。114号からは、土器4片、4個体分が出土した。

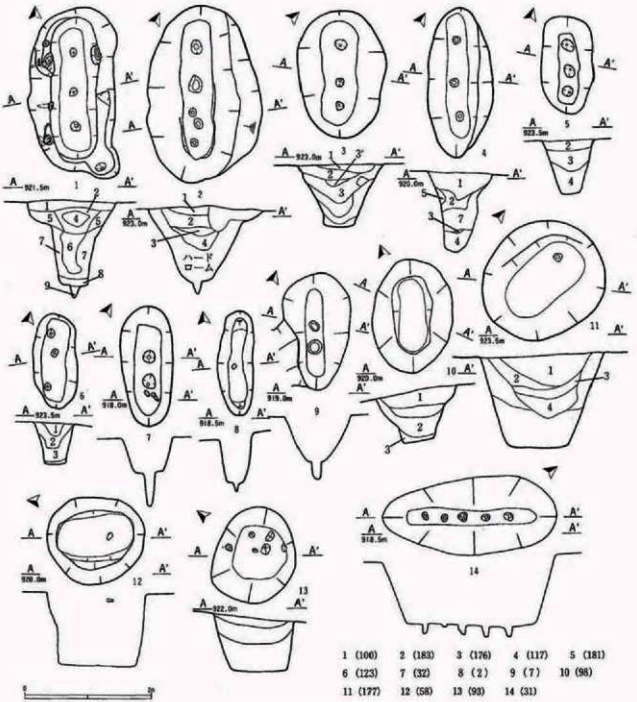


第12図　晩 期 の 土 壙（1/60）

6．陥　　穴

陥穴も集石同様、時期の決定ができない遺構である。明らかに陥穴と判別できるものは25基で、逆茂木をさして固定するための、小穴があいているもの19例、小穴のあいていないもの４例である。

平面形は殆どが小判形だが、円形のものもいくらかみられる。小判形で穴のないもの３例、１穴のもの１例、２穴のもの３例、３穴のもの12例、４穴のもの１例、５穴のもの２例、円形のものでは、穴のないもの１例、１穴のもの１例、２穴のもの１例、不明１例である。



第13図　陥　　穴（1/60）

分層の粗い細かいはあるものの、すべてが自然埋没の過程をしめすように凹面状に堆積している。一、二点気付くのは、100と123号の最下部で、上部の崩落土がローム系の黄褐色であるのに比べ、この土だけは暗褐色土でまったく異なっている。これは陥穴の構造と関係があるものと思われる。

これら陥穴は、集落の北側の尾根の頂部にあり、集落を画するようにして、おおむね主軸を南北に向けて一列に並んでいる。

7．土　　墳

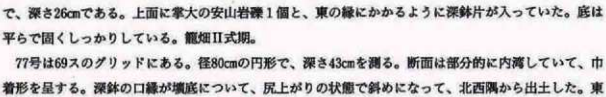
土壙は、調査の時点で用途が明確でないものが多いことから、分別せずに全てを穴として番号を付した。このうち、陥穴だけは整理の段階でぬきとった。以下は、そのうち墓穴の可能性が高いものをあげた。41号土壙は28号住居の東側に位置する。径90cmの円形で筒形を呈する。深さは40cm。穴の下面に、拳大から掌大の安山岩礫15個が底にへばりつくようにして検出された。出土した遺物から、籠畑Ⅰ式期である。

158号は55ツのグリッドに位置する。長軸1.15、短軸67cmの茄子形の穴。穴の上面からは、彫刻のある偏平な石うすの半欠品が出土した。時期は籠畑式期である。

62号は69セのグリッドに位置する。暗褐色土が充満していて、周囲と色の差がはっきりとしていた。穴の中ほどに土器が平らになって割れていた。土器の回りに２、３拳大の安山岩が置かれている。壙底は凸凹しているものの、土器とのあいだに暗褐色土の間層がある。籠畑Ⅱ式期。

68号は近世の建物址の南東、1.1mのところに位置している。平面形はすこし歪んだ84cm×67cmの円形で、深さ26cmである。上面に掌大の安山岩礫１個と、東の縁にかかるように深鉢片が入っていた。底は平らで固くしっかりしている。籠畑Ⅱ式期。

77号は69スのグリッドにある。径80cmの円形で、深さ43cmを測る。断面は部分的に内湾していて、巾着形を呈する。深鉢の口縁が壙底について、尻上がりの状態で斜めになって、北西隅から出土した。東側の底に近い場所からは、卵から拳大の安山岩礫７個がまとまって見つかった。籠畑Ⅱ式期。

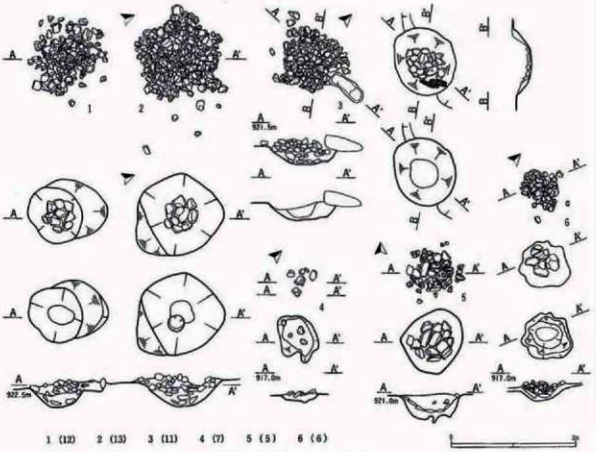


1 (41)　2 (158)　3 (62)　4 (68)　5 (77)

第14図　土　　墳（1/60）

8．集　　石

集石は14基検出した。集石は、石を集積しているもの全てに番号を付して調査した。しかがって、必ずしも全部が用途や機能あるいは形が同一であるとは限らない。くわえて、なかから遺物などが出るこ



第15図　集　　石（1/60）

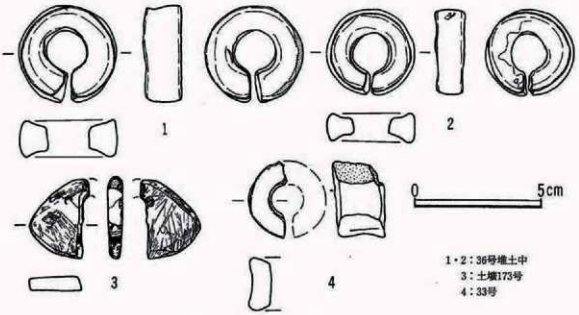
とがほとんどなく、正確な時期の判断ができていない。ここでは、典型的なものだけを取り上げて記述することにした。

12・13号は65ニのグリッドにあり、2基が接近して並んでいた。12号の集石はいくらか山に盛られている。上から20cmのところまでは、ぎっしりと石が詰まっており、そのあいだには、暗褐色土に少量の炭が混じった土が入っていた。そこから穴の下方は、黒色土に多量の炭が混じっていた。ちょうど分層線あたりに炭化材が多く見られ、焼土もいくらか観察できた。拳大から掌大の安山岩礫を取り除き、下部の調査に入った。いくらか石の少ない間層の土を取ると、安山岩の礫を用いて、お碗の底のように緩く立ち上げた施設があった。ここで火を焚いたらしく、この石の上面と、穴の側面がところどころ焼けて赤くなっていた。石敷と壙底とに間層があることから、石敷の高さや大きさを調整したことがわかる。穴の上面の北側は、ちょっとした段になっている。集石を構成する石の全てが、熱を受けて赤変していたり、煤けて黒くなっていた。遺物は出土しなかった。

13号は12号の北に位置する。同様に少し山盛りにぎっしりと石が積んである。土層のあり方は12号と同じで、上下2層に分層できる。いくらの間層があって、本址のは皿状に石敷がされていた。やはり石敷と壙底とに間層があることから、石敷の高さやかたちを調整したことがわかる。

壙底の石敷は東側の3個がかなり赤変している。穴の側面、上端に近い場所がリング状に焼けて赤変している。穴の上面の南側は、ちょっとしたテラスになっている。遺物は出土しなかった。

このような下部に敷石のある例は、5号、6号、土壙124号にもみられた。



第16図　鈌　状　耳　飾 (2/3)

9．鈌　状　耳　飾

1・2は36号の堆土中、すこし西によったところから1が左側、2が右側にあって、両者とも鈌けている抉りの部分が内側を向き、内側が高く、外側が低くなって出土した。

4は33号出土。半欠品。3は土壙173出土。滑石製。土製耳飾りは、龍畑遺跡10号址、日向1号址から出土している。

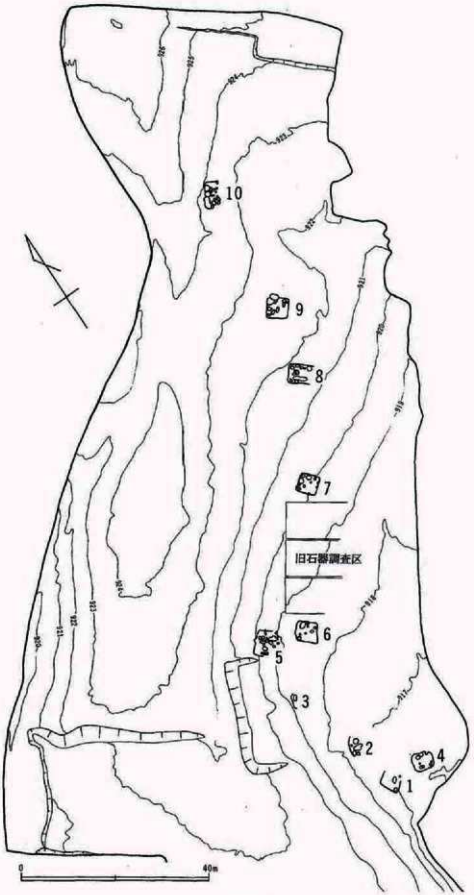
第3節　平　安　時　代

10軒が検出された。これらは斜面から平坦部に移る、およそ地形の変換点に間隔よく直線的に並んでいる。こうした北側に小高い尾根を有する場所を選んで住まうというのは、この時期、この辺の大きな特徴である。いま一つは、10軒中6軒が焼失家屋であることだろう。各戸が適度な間隔をもっていることから、類焼とは考えにくい。原因は明らかでないが、一時期一斉に、村全体が火に包まれたものと思われる。

H－9号址は調査区のわりと北寄りに位置する。住居の輪郭を決める際に、すでに炭化材が現れていた。一辺が4.60mの正方形で、東北側の辺の中ほどに石組みのカマドを有する。焼失住居で、炭化材が西側に多く放射状に出土した。割り板や角をとったようなクリ材を用いている。

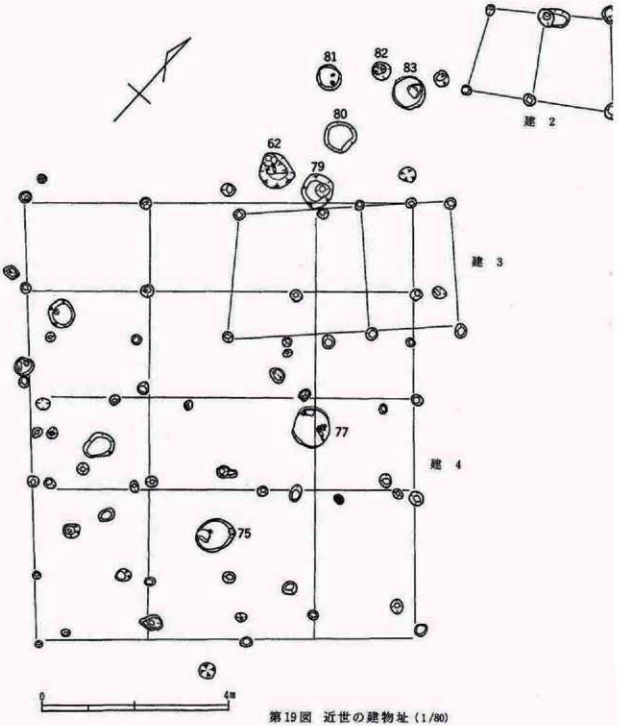
本址の西北側、炭化材を覆うようにして焼土がある。こうした焼土のあり方は、他の住居址にも共通している。これは、屋根に泥を塗ったその土が焼けて赤くなったものと推測される。

炭化材を取り上げ、床を精査すると、いくつか穴の輪郭が見えた。一つは明らかに縄文時代の陥穴。他はみな住居に伴うもので、焼土まじりの褐色土が入っている。カマド左手のそれぞれの穴は、固くた



第17図　平安時代遺構配置図（1/800）

第18図　H９号住居址（1/60）



第19図　近世の建物址（1/80）

たいて貼床してあった。

床はロームで固くしまっている。カマドの左側に2本の主柱穴が東西方向に確認された。棟持柱であろう。内側の柱穴の上面には、柱を固定させるための石が詰めてあった。

カマドの残存状態はわりとよい。袖石は薄い板状の地山石を2枚縦に並べて立ている。左の石は折れていたが、上にあった石と接合した。袖石を覆うように、焼土と褐色土を混ぜた土をぬって袖をつくっている。焚き口の中央にはまっすぐに安山岩を立てて、支脚が据えられている。焚き口は、10cm下まで真っ赤に良く焼けている。

遺物は、カマドの左手から内黒の坏が正位で、赤褐色の坏が伏さって出土した。他はすべて破片で、整理箱1箱分出土した。

本遺跡の焼失住居は、1号、3～6号、9号の6軒である。

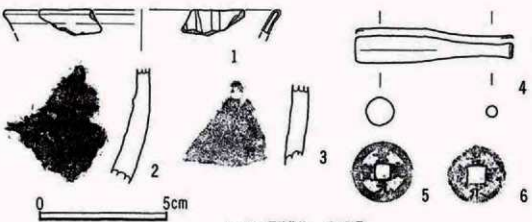
第4節 近　　世

近世もしくはそれ以降の建物址は、発掘区東側の母沢川に落ちる小さな枝沢の最上部、わりと平たくなった沢寄りから検出された。4号建物址は、南北8.92m，東西8.32mでほぼ正方形をなす。東によったところに、径24cmのこぶりの焼土がある。柱の穴からは、キセルの吸い口と陶器片、内耳鍋片が出土した。またこの建物の前方、沢の落ち口部から銭貨の「景徳元宝」1枚を採集した。3号建物址は4号の北西隅にあって、4号建物址と重なっている。1間2間の小さな建物址である。

2号建物址は3号の北方にあって、並行している。妻側の辺が平入側に対して直角でなく台形であることや、柱穴の大きさや深さなどの規模が小さいことなどから、柵列の可能性もあろう。

1号建物址は、平安時代の8号住居址から西北側に少し寄ったところに位置している。南東側の陥穴の上面に焼土がみられたが、本址に伴うものと思われる。本址の時期は、近世と思われるが、柱穴に入っている土がわりとしまっていて、2から4号のものと違っていることから、平安時代の可能性があることも考慮しておきたい。

また、1号住居址の中央の新しい攪乱穴の下部から、かなり腐敗した銭貨の「寛永通宝」が1枚出土したが、4号址の南側に条状にあった炭焼き跡とあわせて、建物址との関連があるものと思われる。

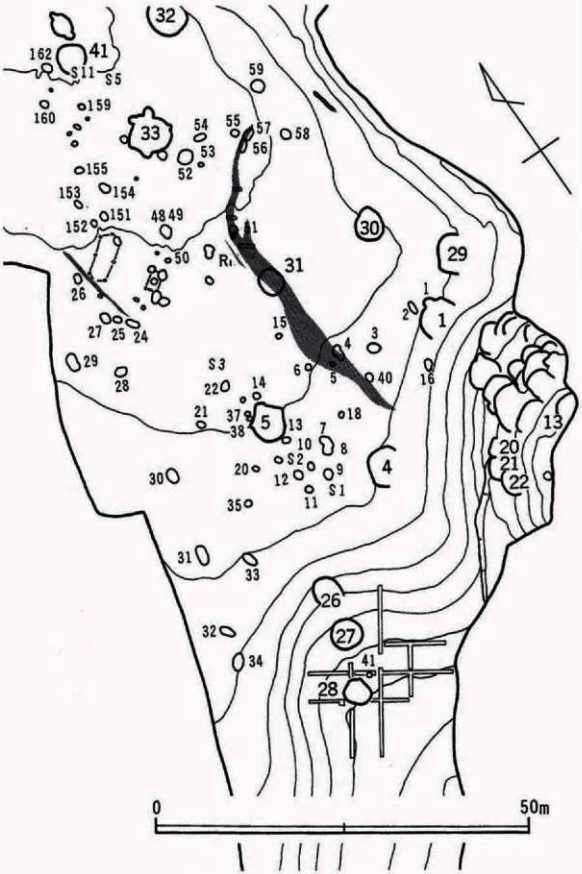


1～5：4号建物址　6：J1号

第20図　出土した遺物 (2/3)

第5節 地 山 の 裂 傷

地山の裂傷とは、活断層の活動によって地殻が変動して地震をひきおこし、それによって地山が裂けてしまったものである。33号址の南東側、枝沢に落ちる沢の斜面部56ケのグリッドに南北方向に約4

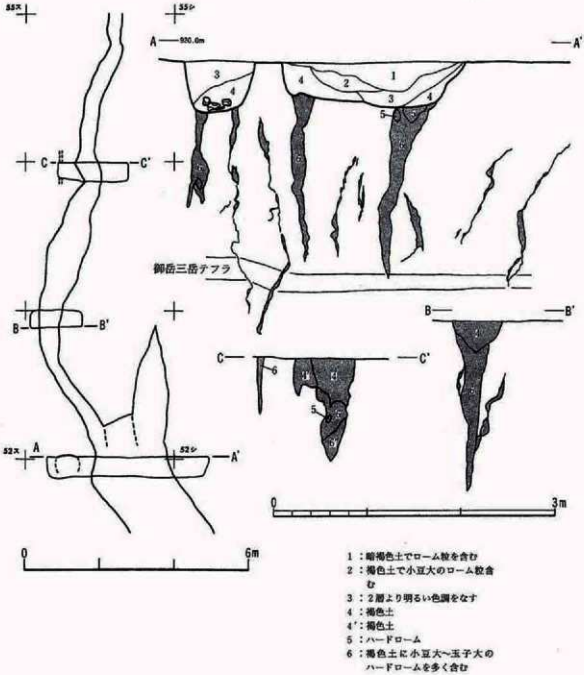


第21図　地山の裂傷 (1/500)

m,33号址の南東、57号小竪穴から31号住居址を経て、5号そして4号小竪穴の西側を通って4号住居址の東側までと、5号建物址の西南側、棟持柱のあたりから南西側に延びて25号小竪穴までの三条が見つかった。

なかでも真ん中のそれは規模が大きく、長さおよそ40m，最大幅3.8mである。平成8年度に3箇所にトレンチをいれ、断面の観察をおこなった。最も多い場所で4条の裂け目が観察できるが、幅が一定していてある程度の長さを有しているのは、一条のみである。いわゆるクラックの間には、稲妻のようなひびが2～3条づつ入っている。割れて隙間ができた部分は、空洞になっている。

この割れ目は、深さ2.90cmまで観察できたが、それ以下はわからない。しかし大きな割れ目の先端が、



第22図　地山の裂傷　52—55グリッド（1/100）と断面図（1/40）

2.34cmまでで終息していることから、下方はひび割れた状態がいくらかあるだけと思われる。

真ん中の裂け目の1.40cmのところと、右側の裂け目の1.60cmのところに北に「く」字状に折れている箇所がある。この右下がりの現象は、下部の2.10cmあたりにある御岳三岳テフラがひび割れのところでおれて水平でなくなっている現象と深く関わっているものと思われる。

このことは地震の揺れもしくは地割れのときに、上層の部分が下方の動きに対してうまく呼応しなかった結果と思われる。

この地割れの時期であるが、Aの断面を切ったところ、小竪穴の一部分と1.80mの落ち込みがかかった。これらは上面では全く遺構として検出することができなかった。この遺構は地割れを切って作られている。小竪穴の底には拳大の安山岩礫が3個と九兵衛尾根期の土器片が入っていた。このことから、地割れは九兵衛尾根期よりも古い時期に起こったものと判断できる。

遺跡の発掘でこうした地割れが見つかったのは、諏訪市の荒神山遺跡や原村の阿久遺跡があり、最近の調査では、茅野市の阿久尻遺跡に同じ地割れが観察された。本遺跡と同じように、尾根に並行して地割れが起きている。阿久尻遺跡のものは規模が大きい。ここでの地割れの年代は、6300年前より僅かに古いとされる。規模はともかく、地割れの状態が似ていることや出土した遺物の時期が意外に近いことから、本遺跡もそれと同じ地震によって引き起こされた可能性が高いと言えよう。

第6節　机原三本松遺跡出土木炭放射性炭素年代測定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試　　料

試料は、長野県富士見町に所在する机原三本松遺跡の住居址と土壙から採取された炭化材である。これらは出土した土器によって、各遺構の時代が推定されている。測定は、これら遺構の年代を明らかにし、あわせて土器の年代を算出することを目的として行った。そこで、同町から発見されている同時期の試料も測定し、比較した。詳細は、測定結果とともに表1に示す。

2．方　　法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代の算出にはLIBBYの半減期5570年が使用されている。

3．結　　果

測定結果を表1に示す。測定年代は、1950年からの年数（y. B. P.）である。どの試料も誤差の年代幅は比較的小さいことから、試料の測定条件は比較的良好であったといえる。以下に各遺跡ごとに、年代値について検討する。

表1　放射線炭素年代測定結果

試料番号	遺跡名	遺構名	出土遺物	測定年代	測定番号
1	机原三本松	37号住居址	早期押型文	9150±100 (7200 B.C.)	GaK-19835
2	机原三本松	32号住居址	黒浜	5700± 90 (3750 B.C.)	GaK-19836
3	机原三本松	33号住居址（柱材）	鴛畑Ⅰ	6110± 80 (4160 B.C.)	Gak-19837
4	机原三本松	39号住居址	九浜衛尾根	4450±160 (2500 B.C.)	Gak-19838
5	机原三本松	穴124（No.5）		5480± 80 (3530 B.C.)	Gak-19839
6	坂平	58号住居址(1517-チ)	中越	7120± 90 (5170 B.C.)	Gak-19840
7	坂平	2号住居址（1486）		5940± 80 (3990 B.C.)	Gak-19841
8	坂平	14号住居址(1482-1)	中越　石瓜丁	5860± 80 (3910 B.C.)	Gak-19842
9	唐渡宮	17号住居址	黒浜	6800± 80 (4850 B.C.)	Gak-19843
10	机原	10号住居址	諸磯a	5040± 80 (3090 B.C.)	Gak-19844

(1)　机原三本松遺跡

5点の試料のうち、試料番号1～3の3点は、これまで得られている出土遺物の年代観（キーリ・武藤（1982）など）と比較すると、やや古い年代値であるといえる。試料番号1と2については、それぞれ縄文早期の押型文および縄文前期中頃とされている黒浜式と比べると1500年程度のずれが認められる。一般に放射性炭素年代値が推定年代よりも古く出た場合、今回のように試料が炭化材の場合は古材の再利用や埋積後の土壌中からの炭素の吸着などが考えられている。今回もそれらの可能性があるが、試料とした炭化材と遺物および住居址の共伴関係も再確認したい。

試料番号4については、縄文中期初頭とされている九兵衛尾根式の年代観とほぼ一致する値が得られている。

試料番号5の年代値については、それを比較検討できる材料がないため、ここでは議論することはできない。試料番号2が採取され、黒浜式の土器が出土する32号住居址のような遺構があることから、穴124は、このような遺構とほぼ同時代の遺構である可能性がある。

(2)　坂　平　遺　跡

縄文前期初頭とされている中越式の土器が出土している住居址についてはその測定代値と土器の年代観がほぼ一致している。一方、試料番号6が採取された58号住居址では、測定年代値と土器の年代観との間に1000年ほどの違いがある。これについては、机原三本松遺跡の試料番号1～3が採取された住居址と同様にその年代観を絞り込むためには更なる、検討が必要と思われる。

出土遺物の情報がない2号住居址は、試料番号7の年代値から14号住居址と同時代の遺構である可能性がある。

(3) 唐 渡 宮 遺 跡

唐渡宮遺跡の試料番号９の年代値は、伴出した黒浜式との年代観との間に1000年以上の開きがある。これについては、上記机原三本松遺跡の試料番号１～３および坂平遺跡試料番号６と同様に考える。

机原遺跡の試料番号10の年代値は、伴出した諸磯ａ式の年代観とほぼ一致する。

引 用 文 献

キーリ　C. T. ・武藤康弘（1982）縄文時代の年代。縄文文化の研究　1，p. 246-275，雄山閣

写 真 図 版

遺 跡 遠 景

遺 跡 近 景（調整池分）

写図 2

遺 跡 俯 瞰（東方上空から）

No1, 地点 1 号 小 竪 穴

住居集中区の調査

No1, 地点 2 号 小 竪 穴

41号住居址の調査

No1. 地点　遠　　景

No2. 地点　調　査　前

No2. 地点　試堀トレンチ調査

No2. 地点　試　　堀

表土剝ぎと遺構確認

南向き斜面の調査

32号住居址の調査

住居集中区の調査（南から）

写図4

遺跡俯瞰（南から）

37号住居址（北西から）

斜面に構築された住居址群

37号住居址　磨盤石と磨石のセット

ブレイド出土状況

39号住居址　埋甕炉

33号住居址　遺物出土状況

36号住居址　堆土内出土の缺状耳飾

35 号 住 居 址

41 号 住 居 址

30 号 住 居 址

13 号 住 居 址

4 号 住 居 址

15・16・17号住居址

32 号 住 居 址

沢の凹地につくられた26・27・28住居址

写図 6

35 号 住 居 址

40 号 住 居 址

33 号 住 居 址

36・38・39号住居址

1 号 小 竪 穴

2 号 小 竪 穴

5 号 建 物 址

6 号 建 物 址

12・13号集石

5 号 集 石（上面）

11 号 集 石

5 号 集 石（下部）

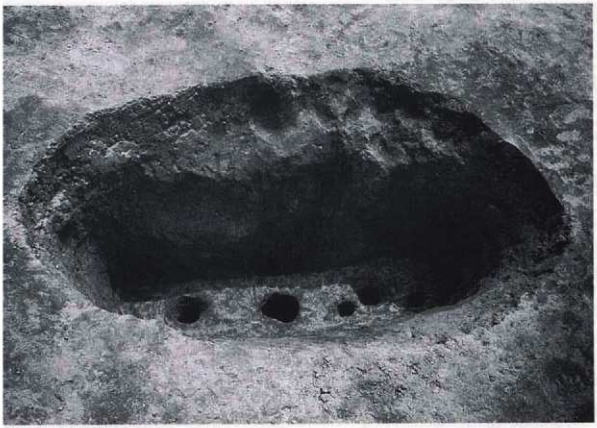
6 号 集 石（上面）

9 号 集 石（上面）

6 号 集 石（下部）

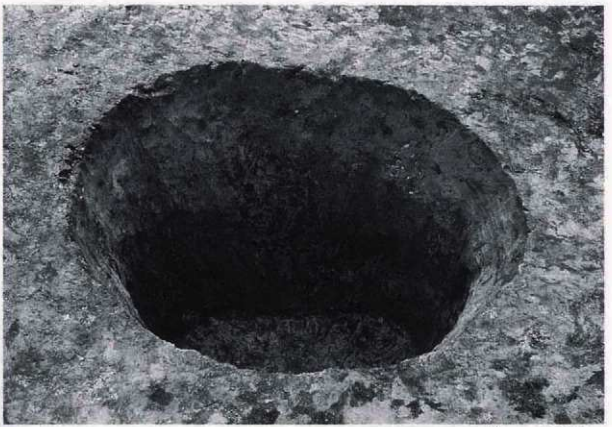
9 号 集 石（礎石）

図 8



陥　　穴（穴183）

陥　　穴（穴95）



陥　　穴（穴177）

陥　　穴（穴93）

写図10

陥　　穴（穴181）

陥　　穴（穴7）

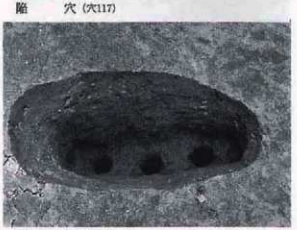
陥　　穴（穴88）

陥　　穴（穴2）

陥　　穴（穴123）

陥　　穴（穴117）

陥　　穴（穴179）



陥　　穴（穴181）

前期の土壙群

土　　壙（穴138）

土　　壙（穴139）

土　　壙（穴1）

土　　壙（穴158）

写図12

土　　壙（穴82）

土　　壙（穴77）

土　　壙（穴68）

土　　壙（穴46）

土　　壙（穴75）

土　　壙（穴50）

土　　壙（穴157）

土　　壙（穴162）

晩期の土壙群（左から 穴115、114、113）

土　　壙（穴122）

写図14

H 4 号住居址　炭化材出土状態

H 4 号住居址

H 4 号住居址　完　　掘

H 4 号住居址　清　掃　作　業

H 1 号　茅の出土状態

H 9 号　炭化材出土状態

H 9 号住居址

写図16

H 7 号住居址

H 7号住居址　カ　マ　ド

H 10号住居址

H 3 号住居址

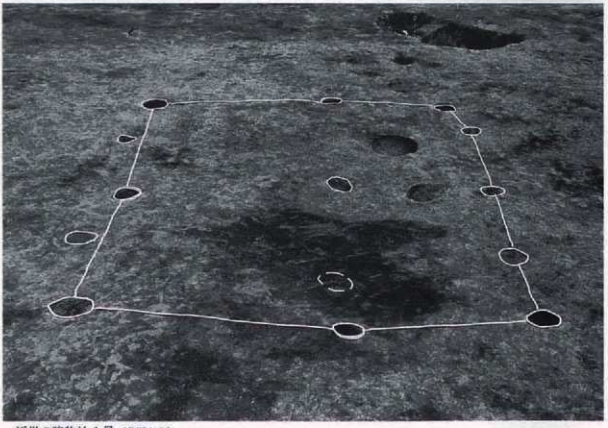
H 5 号住居址

H 8 号住居址

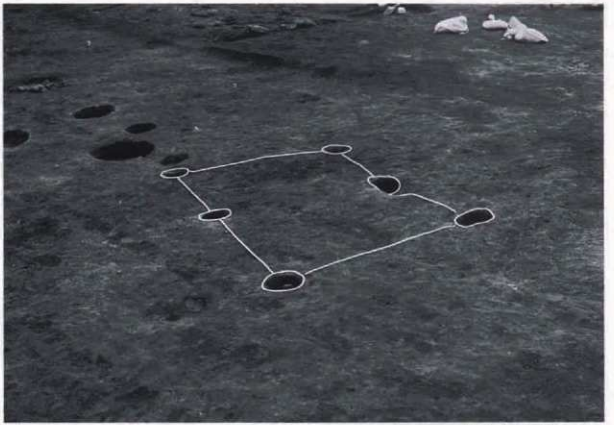
H 5 号住居址

写図18

近世の建物址 2・3・4号（南東から）



近世の建物址 1号（北西から）

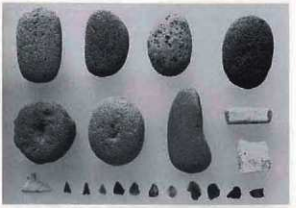


2 号 建 物 址（東から）

地山の裂傷 52ライン A－A′断面

写図20

27号住居址



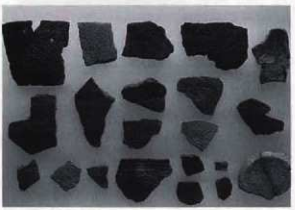
27号住居址

9号住居址

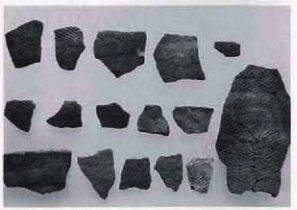
9号住居址

14号住居址

14号住居址



2号住居址



26号住居址

机原三本松遺跡

——県営富士見高原産業団地造成
事業に伴う緊急発掘調査報告書——

1998年3月

発行　富士見町教育委員会

印刷　もえぎ企画書籍
〒394-0043　岡谷市御倉町2-21
TEL　0266-22-4892